

昭和三十四年十月二六日ご講演

「文学のあけぼの」——アイヌ叙事詩『ユーカラ』の研究を中心として——

金田一京助先生

今夕図らずも、こういう立派なお席で私のつまらないお話に御清聴を煩わすことは、誠に光栄の至りに存じます。只今御紹介の言葉にございましたように、私はアイヌの方の調べを少々致しました。片寄った話で皆様に御興味をお感じさせ申す事が出来るかどうか、心許ないところもござい

ますが、一見あるかないかのような存在の中にも親しく下りて行つて親切に観察すると、こういう大事な事もあるものだという事を私の体験から一応お聞きになりまして、何かの御参考にして載ければ俵せだと考ふる次第でございます。

物好きの人の書きつけたものだというよ  
うなものに過ぎませんでしたから、進歩が  
実は伝えられていなかったように感ずる  
のであります。私、何も好き好んで始めか  
らそういう調べをして一生涯を暮そう等  
という事は思いもかけませんことでした。  
ただ日本語というものの起源、発達、何時  
の代、誰が始めたとも知らず、国民と共に  
存在して今日に至りましたこの極めて特  
徴のある、変つた、美しい国民的な大きな  
財産が、何時、如何に、どのような所に発  
展したものであるうか、この日本語の起源  
とか、或いは発生の形態とか、或いは兄弟  
姉妹の關係に立つ言語学、世界のどの辺に  
存在するか、という問題に興味を持ちまし  
て、大学へ入りました時に、言語学科へ入  
学致したのでございました。そうやってみ  
ますというと、第一番に私共の手をかける  
ければなりません事は、日本語の周囲の言  
語と日本語が先ずどうという關係にあるか、  
琉球語と日本語とはどうという關係にある

か、支那の言語と日本の言語とはどうい  
う關係にあるか、朝鮮語との關係はどう、満  
州語との關係がどう、蒙古語との關係はど  
う、こうやつて見て来ますと、アイヌ語と  
日本語との關係がどういいうものであるう  
か。私が大学に入りました頃に長く北海道  
におりましたジョン・バチエラー (John  
Batchelet) という宣教師の方等は、日本  
語はどれもこれもアイヌ語が基になって、  
アイヌ語が即ち日本語になったのだ、そう  
いふような大胆な学説等を発表しておら  
れますのを読んでみますと、疑問百  
出、到底そのまま納得出来ません。この方  
の書かれました文法書や字引も出来まし  
たけれども、どの頁にも我々はそのまま受  
取り難い論断がございしますので、これを研  
究するのには東洋人の頭で、東洋人の見方  
をもって特有に観察しなければいけない。  
そうするには西洋人の書いたものでな  
しに、直接北海道に渡つてあの人達の口か  
ら響くところの音を、この耳で聞いてこの

頭で考え直してみたいというような欲望を生じまして、初めて探検致しましたのが大学二年の夏休み、まだ私が二十三、四の時でございましたでしょう。

至るところ、こちらで考えている事の事実を現地に立証する事が出来て、自分ながら胸を躍らせながら一歩一歩あの人達の部落を尋ね廻って行きますと、胆振の国の東の果て鶴川という所のアイヌ部落で五、六人の爺さん達と話をしておりますうちに、一人の爺さんが、「旦那がそういうような言葉を調べたって、アイヌなら誰でも知っている事だ。アイヌの方にもそういうふだんの言葉と違った、アイヌの古い祖先が自分で自分の戦物語を物語ったユーカラというものがあって、その言葉だったら難しいものであり、また日本人も西洋人も手をつけていない。そういうアイヌ語を調べてこそ、アイヌ語を調べたといえるんじゃないだろうか」。そういう事をいう年寄りが一人おりました。後でやっと聞きました、この人は、この土地の唯一のユーカラというものの名人だったんだそうです。それでそういう事を私に歌ったものですから、私は聞き耳を立てて驚きながら「歓びだ!」。何故ならばアイヌの言葉を調べるといって、彼等の毎日話しているも

のを耳で聴いて口で真似をして、彼等のようにしゃべるようになったからといって、何も必要というものは別にありませんし、大した興味でもないのですが、彼等にもし文字でもあって古いアイヌ語の記録でもあるなら、遡ってそこまで調べて行く事によってはじめて深い研究が出来るのでありますから、学問的な興味も湧くのです。けれども、今日の言葉だけを調べていて、たった一歩も遡って古いところまで行けないとすると、興味が少いはず。それが日本ではまだ専門的にこれを研究しようという学者が現われなかった所以(ゆえん)でございました。丁度この爺さんの言う事でもし本当だったら最も耳寄りの事だと思ひまして、その時にその言葉がふだんの言葉とどういうふうに違うかといひましても、ただ顔を見合せてはつきり教えてくれるものはいませんでしたが、「アイヌ語で神様の事をカムイというが、この言葉では何というか」と云ったら、「その言葉でも神様はやっぱカムイだ」と申しますから、「何だ何も変ったところがないじゃないか」といひましたら皆笑ひましたが、「いやそれでもやっぱり違うんだ」とこう申すんです。その時私は一寸「打つ」といふ言葉をきくと、アイヌ語で、「キク

キク」と申しました。「打たれる」という時には「アエンキク a-en-ki-k」です。日本語だったら語尾の方が変化しますのに、アイヌ語では頭の方が変化して、「打たれる」というこの受身の言葉がそういうふうに出てくる事でも、日本語の文法とはかなり違った味のある事だとは思つておりました。そのため、それを始めた直後だったので、ではそのユーカラとやらいふ難かしい物語の言葉では「私は打たれた」といふ事を「アエンキク」といふかと云いましたら、皆ワーツと笑ひました。そう云わないらしいのです。何と云うかと言つたら「チコモナニアイエカラカラ」と云う。まるで違う。はてな本当かしらと思つて、バチエラー博士の書いたアイヌ語の字引を鞆から出して引っくり返して見ても、そんなものは書いていない。怪しいなと思ひましたが、満更私をかついででたらめを云う様子ではなかつたのです。

翌日は日高の沙流川河口の佐瑠太(サルプト)という所でその老人達にその事を云ひましたが、誰も教えてくれようとはしません。それから打つ、打たれるというような事を聞いてみるといふと、真面目な顔して、「チコモナシアイエカラカラ」といふものだというのです。昨日とほぼ同じです。

昨日は「チコモナニアエカラカラ」、今日は「チコモナシアエカラカラ」。方言の差であるかも知れませんが、兎に角そういう言葉の存在することが明らかになったものですから、喜び勇んで翌日愈々日高の沙流郡の平取（ピラトル）というアイヌの初代の英雄が天から降りて都した所——今はその跡に義経神社が建っておりませんが、そこへ入って行って七十幾つの白髪の爺さんと呼んで、この爺さんへ「ユーカラというものを教えてもらいたい」と云ったら、「宜しい、教えて上げよう。ただ此方の耳から入って此方の耳から逃げて行ったんでは何にもならない。ゆっくり言うから書いてごらん」という。願ったり叶ったりの事を云ってくれたものですから、宜しい、では書き留めよう、とそう云って鉛筆を五、六本削りまして、今のように万年筆がありませんでしたから、爺さんの云うのを全身の神経を二つの耳に集めたように息をもこめて、じつと聞きすまして書いていったんです。「イレシユシヤポー イレシユパヒネー ランマカネー カツコロカメー オカアニシケー」。そういうふうを書いていったんです。何の事か一つも解らない。これで私は驚きながら胸轟かせて書いて行ったんですが、何と言っても

書くのは口で言うのよりは遅い。そのために一音の字も聞き落したんでは解釈する時に意味が違つて来るかも知れませんか、微かな首でも聞き落すまいと懸命になりました。カルタを取る時、皆さん始めの一音で取ろうとしますから息をも止めて緊張しましょう。然しながらあの緊張も誰かポーとはねる音がすると次の歌に移るまで休んで、また緊張しいしいする事が出来ますけれども、のべつまくなしに緊張のし続けですから、一時間もかかった時には全身汗とあぶらになってしまいました、へとへとになりました。早く終わってくれりやいいのに、何時までたつてもお終いと云わない、少しいらいらして来ます。二時間も続いた。まだ終らなかつた。鉛筆がちびれて来ましたから、「爺さん、済まないが一寸待ってくれ」と云つて、そうですね二時間か三時間か書いた後でした。

待ってもらつて鉛筆を研ぎながら、書いたところを試しにパラパラめくつてみますと、そう思つて書いたんじゃないですが、どの頁もどの頁も、真中から下がスーッと抜けて空いている。丁度英語の詩集でも開いたようです。それで私は驚いたのです。ユーカラというのは祖先の英雄話だというが、『平家物語』とか或いは『源平盛衰記』とかいったような散文ではなく、詩だなり、と思つたのです。詩でもつてこれ程長い。もう何百書いたか知りませんが、もまだ終つていない。丁度昔のギリシヤ人は『イリアッド』、『オデッセイ』という一大叙事詩を持つておりますね。文字の無かつた遠い昔から忘れちゃいけない事を懸命に暗誦して、主に盲がそれを暗誦して、人々に時として高吟して聞かせたものなんだそうです。中世のヨーロッパのあのバラッドをバード（吟遊詩人）が歌つて歩いた時にはライルという豎琴に合わせているけれども、ギリシヤの昔にはまだそんな洒落たものは無いから、一本の棒でもつて座を叩いてそれが伴奏でした。そうやつて歌つたものなんだそうです。聴く人がこう寝そべったり横になったり腰かけたりして聴いている昔の絵が、名画にあります。ホメロスの作といわれたものでありますけれども、だんだん研究の結果、何時の代とも知れぬ文字のない古い時代に民族の間に口ずから伝えて来た。大抵盲が記憶がいいからそれを専門にした。ホメロスは最後の盲、ホメロスの時にギリシヤ文字が入つて来てそれを書き記したのが残つて、一時はそれも散逸してしまうんですけど、熱心な学者の総合研究によつてと

うとう全容が明らかになって、これがヨーロッパ文明のそもそもの魁となった。ヨーロッパ文学の曙といわれ、人類の初めて持った、——今の文学とは意味が違って、その通りを民族が事実と考えているから——、民族の歴史でもある。また問題が起った時、それを引用して裁くから、法典でもあった。また不心得者があつた場合にそれは戒めの聖典でもあつた。それが古代叙事詩というものの真実な姿だつた。

そういう事を私は本で読んでいたものですから、「何だ、アイヌは叙事詩を持っているんじゃないか」という、驚きと歎びで一人で胸がふるえるようでした。眠いも疲れたも、もう吹き飛んでしまいました。是非ともこれをお終いまで書き取ろうと懸命になって書いたので、終つた時には夜の十二時が過ぎました。見る影もない生活の人達に云つたつて、こういう長い叙事詩をなかなか聞かせてくれないけれども、心のある老人がこうやって好意をもつて慕つてくれた事に私をはじめ遭遇した。日本民族も文字の無かつた時代には語部(かたりべ)というものがあつて、昔からの古い氏族の伝説を語り伝えていた。日本の最古の文献の古書記というものは稗田阿礼という人の暗誦していたものを太安万侶

が筆記したものだといっているけれども、今日我々が鉛筆だの紙だのローマ字だのというのを持っていくからして言う人に追つ付いて書いて行く事が出来ますけれども、紙の少なかつた時代、殊に毛筆しか無かつた時代、然もその文字は漢字のような字面の多い、一音を一字で書く大変な時間を取り、到底語部の伝えていくまま筆で速記していける人があり得ようがない。実際にこのローマ字で以て横書きにずうつと書いて行くことすらこんな苦しい速度なのであります。ですから凡そ太安万侶は稗田阿礼の暗誦しているところを筆記したといつても、ただその梗概だけを筆記したんですね。ただ歌のところになるといと伝えの本文通りのものを書き写すに留まる。あとのところは謡い物であつたかも知れないけれども、梗概を簡単に漢文のよくな特別な文体で書き下した。然し我国上代もこういうふうなものではなかつたんだらうかという想像させるところの貴重な事実だつたものですから、今のうちならまだ他の村にもこれがあるそうだから、何とかしてこれを知っている者のいる限り、探して記録をしてみたい。そういう念願を起して帰つたものであります。

古い文献を読んでみますというと、早い

ところは宝永の頃に『蝦夷記』という書物が出来て、「蝦夷の中に軍談浄瑠璃がある。なかなかこれを語るものは少ない。理解する事も困難であるから、通辞に頼んでもこれだけは解らないそうだ。面白いものだと見えてこれが始まると皆大層喜んで徹夜、夜明かし等をやるものだ」という事があつた。最上徳内という出羽の産した大探検家、これは今の北海道を随分よく跋涉しておりましてアイヌを土木作業に使つて夜は一緒に寝てはアイヌ語で会話をしたり、アイヌの言葉をきいたり、話に喜んで耳を傾けたりした人であります。この人の書き残した本の中にやはり蝦夷に軍談浄瑠璃があつてユーカラといつて、兎に角、皆、浄瑠璃のようなものだと思つて書いていたんですね。声を出して歌うものだから浄瑠璃といつたに違いありませんけれども、別にこれを韻文だと自覚した人は誰もなかつたし、また一つの標本も筆記してないのであります。言葉が難しいし、いくら仮名でも容易に追つ付いて書いていけないからです。然し皆さんローマ字だつたら、Kaと二字で書かなきゃいけませんけれども片仮名では「カ」と一字で書きま

す。「ノ」といいたらローマ字なら二字で書かなきゃいけないのを一字で書く。です

から片仮名は案外ユーカラのようなものを書くには書き得るんです。最上徳内の友人の一等の蝦夷通辞・上原熊次郎がアイヌの単語を四千程集めた書物のお終いのところに、その軍談浄瑠璃というものが片仮名で書いてある。片仮名でずうっと書いてあるが、訳がついていない。そしてその片仮名が、皆丁度、今私が区切って発音致しましたあの長さでポキッと点が打つてある。この筆記を見ても韻文だという事ははっきりしているのです。片仮名でどの句もどの句も同じ長さであつて決してだらだらと続いたり、短い言葉がポツンと出て来たりする散文ではないのでありますけれども、まだこの人達も叙事詩などというよな事があるうと考えもしなかつたんですし、誰一人、詩だともいわずに私の時代まで来たのであります。

さあこういうものを何として解釈したらいいか。樺太アイヌの方言を観察して両方を比較対照して行つたら同じ言葉が両方に分れるのだから、分れる以前の古形を想定して行く事が出来る。そしてこのユーカラが初めて解釈出来るんだがなあ、とどうかして樺太に行きたいと念願致しましたが、大学三年の論文等を出して及落も未だ解らない中に丁度日露戦争が終り、樺

太は日本軍の手に帰して誰でも行こうとすれば行けるようになったのだ。早速単身出かけてみました。東海岸のオチヨポツカ、日本軍が占領して落帆村と改称しておりました。まだその頃はオチヨポツカと称えている頃ですが、そこへ一夏、近文(ちかぶみ)のアイヌが集つて鱒の漁をやっているから近文のアイヌが観察出来るという事を聞きましたから、そこへ行きました。この時の苦心談は『心の小道』という随筆になつておりまして、この随筆は案外多くの人に愛読されまして中学の読本の一年の下巻に大抵出ておりますから、或いは皆さんの中にもお読み下さつた方がいらつしやるかと思ひますからこの時の事は省きます。しかし、何処の間人だか知らない者が初めて来たという風な調子で、ちつとも歓迎してくれませんでしたし、相手にしてくれませんでしたから、実に懊惱しました。然し、子供だけは私が近寄つても一向平気で、何かわいわい騒いでおりますから、この子供を相手にしてどうやら単語を採集する事が出来、その単語を覚えたり大人達のいる所へ行つて、出るに任せて覚えて単語でそのものを指して言つと、言葉こそ心の城府に通う一筋の道なんです。皆、

にやつと笑つて、私にもやつと興味がつく

よになつて、すぐにそれから彼等は毎晩々々ものを持ってきて名前を教えてくれたり、親しんでくれるようになったから『心の小道をめぐつて』と題してその一条を話しました。その一等お終いのところへ四十九日の滞在の朝、四千の単語と、大体の樺太アイヌ語の文法を、それから『北蝦夷古謡遺篇』三千行を土産に此の人達と惜しい別れを告げて帰つて来たことと結んであります。この『北蝦夷古謡遺篇』というのは、樺太のユーカラなのです。

このユーカラを採集した事は随筆には書いて居りますから、その時の様子を一寸申し上げてみましょう。滞在して十五、六日経つた時に私の脇へ便々たる太つ腹を出している親爺のラマンテというのが来た。これは曾長だと申して居りましたが、ふだんは解らず屋で、よく酔つ払つて居りました。酔つたらもう理屈の通らない、曾長でありながら困つたという風にされて居る親爺だったんですが、私の脇へ仰向けに寝て、片方の手は眼の上のせて片方の手で腹を叩きながら何か唸り出したのです。びっくり致しました。というのは昔、元旦という画工が幕府の役人について北海道樺太を廻りました。写真班の役目をして二百幾つかの絵を画いてそれが谷元旦

の『蝦夷紀行』として一冊あるのです。その中に蝦夷が浄瑠璃を語るところとして、便々たるお腹を出してそれを叩きながら、その片方の手は眼の上のせて寝ているんですね。それを私は、はてこれはどういうことだろうと不審をしながら忘れずにいたその儘の状態を、私の目の前で素朴な樺太アイヌがやったのであります。ホメロス時代の文学、それから今の日高で聞いてきたユーカラ、簡単な、炉縁を叩く棒くらしいはまだ持っているのですけれども、それもいらぬ、一等原始的な文学の演奏の仕方、これより簡単な事は出来ないんですよ、脾腹を叩いてこれが伴奏なんです。「鼓腹撃壤の楽しみ」という事は古い支那の文献にありまして、「撃壤の歌」等というのがあるんですね。陽が出ると出て耕し、陽が入ると家に入って休む。堯が天子になると、舜が天子になると我はどっちでもいいんだ（有老人、含哺鼓腹、撃壤而歌曰、日出而作日入而息鑿井而飲耕田而食帝力何有於我哉）、という太古の民の悦楽。撃壤という事は地べたを叩く、鼓腹という事は腹を打つという事なんだ。私の目の前でラマンテが腹を叩いて唸ったから、聴き手はみんな平手でもって座っている座を叩くのです。家の中だから座席を叩

いたんですが外だったら本当に撃壤ですね。こういう人間の文学活動の最も原始的な、それを目の当りに見た驚きと歓び！「おい爺さん、それを私が聞いてすぐ忘れちゃ何にもならない。書いて、樺太のラマンテという親爺がこういう事を知っていたという事を東京の人にも教え、後の世にも遺すから、もう一遍静かにやってください」と云ったら、何と云ったか「宜しい、じゃもう一遍やるから書け」「よし、節を抜きにしてくれ」「よし」。節をつけてアーウーと沢山つくという、何処迄が言葉だか、こちらには解らなくなってしまうものですか、そう云ったら喜んで「宜しい」と云って歌い出しましたのは「ボンラモロワ タノンネチャチャ テムコンチレシケ イエカラカラ トーキシパーケタ イヨツセレケレ アナマイイエ ラムペシクンネ コメウナタラ シントコテツ シ プヤツサムパハノ チウレンカレ」。時々ハーツフーツとしゃっくりするような発音、これが子供達の言葉にもありまして何というか聞き取れなかったのですが、大人の発音でもドイツ語のチェー・ハー音の弱い奴です。驚きながらそれを筆記した。その親爺、「どういふ風に来た、読んでみよ」と云ったものだから、「読ん

でみる。その代り少しでも違ったところがあつたら違つたと云って直してくれよ」と云って今私が朗読したように朗読したら、親爺喜ぶの喜ばないの、「おい皆、どんなもんだ、お前達はな、幾ら教えても何ぼ教えても、覚える奴は一人もない。昨日来たこの旦那、たった一遍で覚えた。どんなもんだ」と云って、自分の教え方がいいとでも云うように威張って、そして皆とやどやとやって来て、せいづらも見たらそういうふうな読めるか、といって、私の帳面を見たら、ただみみずのぬらくらしたようなのがずうつとなつていきりですから、おやおやといつてあきれた顔をして居りましたが、これも然し皆その晩はそれつきりで解散してしまつたんです。何とか、あとを書きたいと思ひながら、残念ながら會長なものですから漁業に忙しくつてとうとう書く暇がなかった。愈々明日発つというその日の夕方、夕方いつでも樺太は早く日が暮れますので、午後三時頃はもう夕方なんです、何処からか酒を一本持つて来たんです。焼酎。あのユーカラというのは実は少し飲んで、微醺を帯びて、酔心地で異常意識へ入つて夢を見るような、幻を追っかけながら、それを歌つて行くものらしいのです。それが無いと、

本当はやらない習慣なんです。だから、それが手に入らない限り来ないのだったんです。偶々無理して手に入れて旦那に教えてやろうと云ってやって来てくれたのです。この時は随分苦しみました。これは私と一緒に徹夜してしまっただけです。夜中の一時頃に、「あつ間違つた！」と云って、「今のところ読んでくれ、今のところ読んでくれ」。読んでしまふというと、「もう一遍読んでくれ」。又読むと「もう一遍読んでくれ」と云う。もう私がこれでいいと云って止めようとしたくらいでしたが、したら躍起となって怒るんです。つまり我々の文学のように聴いてただ楽しむためのものではなく、神につながるもの、神聖なものであり、大事なものであり、いやしくも嘘を書き伝えてはとんでもない、それは神様の罰が当る。未来にまで考えているものですから、いい加減にして止そうという事を許さなかつた。とうとう翌日の午後一時頃でしたが、それでいい、それでいいと云って終つた。樺太の夜明が早いので明け方三時頃にはもう明るくなりますが、なかなか夜が明けても終らなかつたんです。それでいいと云って終つた三千行を書いた時にはもう「旦那、舟が来ました」と云って舟の用意が出来て其処を出発しな

ければならなくなつた時刻にやつと終つたのだつたんです。それが三千行ありました。後にそれを出版する時に、柳田國男先生が樺太の事を北蝦夷というもんですから、北蝦夷古謡遺篇、遺つた篇、あとお伝えする人が無いかも知れないというので、古い歌の遺篇という風に標題をつけて下さつて、これを柳田國男先生が出版して下さいました。これを出版するまでの私の苦心。またこれが字引きに一つもない言葉ばかり。それを持って帰つて何とかしてこれを読書百遍、意自ら通ずという事があるんで、暗記する程毎日毎日取り組みました。勤務は、やつと学校を卒業して翌年から三省堂の百科辞典の編集所、そこに言語学を卒業したものを校正部に一人欲しいというので入りました。石川啄木と同じ下宿に暮した頃ですが、啄木の話までふれますとお話ごんぐらかつて、どつちも稀薄なお話になりますから、またお話の機会があるかも知れませんが、今日はアイヌのユーカラのお話をもう少し申し上げさせて戴きます。そうやつて三省堂へ勤務致しました。実は、言語学という学問をやつたために、その頃には中学や高等学校には無い学科なものですから、中学校、高等学校の先生を

しながら、アイヌ文学を研究しようと思つた心が、すっかり当てがはずれて、中学校の先生の資格が無いと言ひ渡されてしまいましたから、殆んど生活に困るところで入つて毎日五時まで勤務しました。家へ帰るといふと、このユーカラと取組んで、東西古今の有りとあらゆる文献をあさつては、これを解釈しよう、一つの同じ言葉がここにもある、ここにもある。これを書き抜いたり、アンダーラインを引いたり、暗記する程やつてもなかなか意味が通りません。然し樺太アイヌ語は、北海道アイヌ語よりも古い面影を保存して居ります。丁度樺太アイヌ語のふだんの言葉の文法が、北海道のユーカラの文法と一致して居ります事を発見致しましたから、樺太アイヌ語の研究はユーカラの研究には非常に役立つのでありますが、それでもなかなか意味が取れません。ここのとこ一つ意味が解りさえすれば、この頁の意味が解るんだが、これが何という事だろうと思つと、何とかしてアイヌに会いたいんだけれども、学校を卒業してしまえばもう家から補助を仰ぐもんじゃないと思つたもんですから、僅かな俸給でやつと暮しているだけで北海道へ出かける旅費は余らない。五

年間苦しんでしまった。その五年目というのは、明治四十五年でございましたがね。此の中私は結婚もして居りまして、初めて持った子が四十五年の正月の七日に急性肺炎で亡くなり、二月には原敬という人の甥、原抱琴という人が、一高の秀才だったんですが、法科大学へ行って法科大学のフランス法の大秀才だったんです。これが二月一日に亡くなりましたし、四月十三日には石川啄木が亡くなりましたし、畏れ多くも明治天皇が七月二十七日にお亡くなりになりました。八月十八日になりましたら私の父が亡くなりました。本当にこの年は私の忘れ難い。あつ！おまけに十月の一日になりましたら三省堂の百科辞典が余り念を入れて校正を九校も十校も取るために資本が固定して一時破産した事がある。編集所は解散になったために、私は失職して無収入になったのです。

もう息の根が止まるような年でありましたが、此の十月一日から拓殖博覧会というものがあり、上野の池の端へ日本全国の異民族を郷里と同じ家を造らせて住ませて博覧会のお客さんに見せる、そういう催しでアイヌが来たのです。北海道からも樺太からも、ギリアック（ギリヤーク）もオロツコも来た。セイバン（生蕃）も来た。人

類学の坪井正五郎先生がこれの諸言語を一覧の下に、例えば「今日は」という事はアイヌ語ではどういふ、ギリアックではどういふ、セイバンではどういふと、博覧会を見に来たお客さんに教えるように、簡単なものを作れと云って私に博覧会に毎日入って行けるような通用券をくれたものです。丁度失職しましたため朝から晩迄一日暇なので、ただ無収入だからどうして生きて行くかこれが問題だったんですが、たまたまその時に今の家内が「絶好の機会だから、何とか暮しは立てて行くから、後顧の憂なくこの機会にうんとやれ」と云ってくれたものですから、「よし！」とばかり朝飯たべると博覧会へ来て困いの外からアイヌへ向つてももの云いかけて彼等の発音を聞いたたり、会話の稽古を試みたり、或いはものをとつてみたり。夕方からお客さんが皆もう帰って行くからアイヌだけ退屈になる、そこへ私が入ってゆく。お客さんが誰もいなくなるとアイヌの小屋まで入っていける。そしてこのユーカラを讀み上げますという、アイヌの驚きと喜び、村にさえ知っている人がなくなるといふ時に、「東京という所は幾ら人が多い所だつて、それを知ってる人がこの中に居ようとは思わなかつたな」と云って喜んで私の

行くのを毎晩々々待っているようだった。行ってそれを讀み上げると本当に彼等が喜ぶのですね。何も喜ばせるのが目的じゃありません。そして要所々々をここが何だ、これ、何の事だ、と遺憾なく聞く事が出来た。五十日の博覧会へ毎日行きましたが、情熱的な時というものは朝飯を食べたきりで、昼飯も食わずに、私は家に十時頃帰つて来て二度分の御飯をお茶づけか何かでがぶがぶつと食べる。それでももう問題じゃなかつたんですね。

そうやって此の博覧会が済んだ時に、その樺太の三千行の叙事詩がすらすらと意味が通つてきて、そしてこれを浄書して上田万年博士、柳田國男先生のお目にかけて、アイヌはこういう口伝えの文学を持つてゐる。詩ですから明らかにこれは叙事詩ですというところをお話したら、ウーツと先生達は唸つてそれを御覧下さいまして、「これはアイヌというものを見直さなきゃならないな」と仰つた。それから京都大学の新村出先生が、この叙事詩の中のアイヌの親爺が外国貿易に舟を乗り出す叙景、海の中へさんぶざんぶと漕いで行く、国土の岸が炉縁のように見える。今迄高いと思つた山が炉縁のように低く見える。だんだん終には、塵のように遙かに三角形に見えるだ



けになる、とそれも見えなくなってしまうというような叙景が詩の形でうまく出来ているものですから、「アイヌの海洋文学は万葉集以上じゃないか」と褒めて戴いて、やっと私の何年かの苦勞が報いられたものだったんです。

北海道から来ているアイヌ達が私に申すのには、「旦那、そういうようなものを調べたいなら、私の村にワカルパという盲爺さんがいる。盲ではない時から、代々この方の達人を出した家だから、若い時に随分声はよし、節はよし、言葉も丁寧で皆を喜ばせたものだが、盲になってからも記憶が一層よくなって、聞いたらもう忘れなない。これが沙流川下流のユーカラの代表的なものだ。『俺が死ぬという』と沙流川のユーカラが俺と一緒に亡びてしまう。知っている人に会って書いてもらったら安心して死んで行けるんだがね」と云ってるんだ。旅費を送って来て下さりや、私連れて来ますよ」と云ってくれる婆さんが居ったのです。何とかしてこれをやり遂げたいと思っていました。

或る日、(母校の)文学部長の上田万年先生を訪ね、学長室の前を二三遍行き来しましたが、とうとうノックした。「入れ」とおっしゃるから、「はい」と云ってその

話をしたんですね。私がまだ半分しか話をしかけなかったんですが、「是非呼び給え、旅費は幾らだ」「汽車賃十五円ばかり」「そうか」。ポケットから自分のポケットマネーをポーンとほうり出して「是非呼べ」とおっしゃいました時にはねえ、私は凡人にお願ひするのに繰り返して二遍も三遍も行つてやっと承知されて来て嬉しいんですが、まだ皆言わない中にそういうふうに分かれないということ、私も若い時ですし、感激しましてね。この先生の為なら死んでもいいなと思つたものだったんですね。本当に死物狂いでした。此の年寄りを呼んだ時、私は何も収入が無かったんですが、従つてその頃に私の家内の結婚式に着た帯だの着物だのというのが何処かへ行つてしまいました。私の袴だの、紋付等も、手も通さなかつたんですが、結婚式はフロックコートだったもんですからね。だが、そうそう上田万年先生から、アイヌ語の研究費用として百円ばかり下りましたから、それを四ヶ月に割つて月に二十五円で暮らして、懸命にこれを筆記致しました。

此の爺さんといつたら、本当に敬虔な態度の偉い物知りです、私は、アイヌのユーカラの中のユーカラと云われる、刀の名前を題にした二大雄篇をはじめ、十四篇の

ユーカラを筆記させてくれた。十冊にいっぱいになったのです。丁度その頃に、日本の古事記というものは、稗田阿礼が暗誦しているものを太安万侶が筆記したんだというけれども、あの頃にはもう文字があつたんだから暗記する必要が無かつた筈であるし、人間一人の頭にあれだけ暗誦するということは、不可能の事だからあれは嘘だろうという説が起つていた。これをもつて文学部長の部屋を訪れた時に、上田万年先生が私の十冊のノートを見て、一人のアイヌの老人がこれだけ暗記していたのか、それならばもう問題なくあの疑問は一遍に消し飛んでしまふと云つて喜んで下さつたのだったんです。

文字の無い時代の暗記力というものは、文字を持つているこの生活から想像しては到底想像できないほど、暗記しなければならぬという心が盛んでありますし、暗記しようとする努力が盛んですし、暗記し慣れていて暗記力が旺盛であります。この間に偶然にも知つたのですが、あの人達の暗記力というものは、道端の親爺をとらまえて、君の親爺は誰だ、その親爺は誰だ、その親爺は誰だと十代くらい前まで知つている。恥しい話ですが私共お互い、お祖父さんのお父さん、ひいお祖父さんま

では、今でも知っていますけれども、それ以上になると私も存じません。アイヌの方へ行ったら、これは笑いものです。無学だなあと云われる。そういうことを今まで知らなかったんですね。今の世からすぐに想像しますから、一人の人間が暗記するのは不可能だと速断していたという事も、こういう事から可能だという事なんだという事が解って来た。

そうやって私が生涯の一等困った、一等仕様のない一、二年を、生涯のうち一等よく勉強致しました。此の明治四十五年即ち大正元年、その翌年は大正二年、その二年間の間に言語学を、それから北蝦夷古謡遺篇をまとめました。

その他に樺太アイヌ・山辺安之助という南極探検に行つて来た親爺、あの親爺、行きにも帰りにも私の所へ寄つて、そして自分の自叙伝をアイヌ語でしゃべったのですが、樺太アイヌ語はこういうものだという標本はそれ迄無かったから、此の親爺の口から樺太アイヌ語の文章をそこに記録をして世間へ遺そうと、そのため一代の自分の物語、南極探検へ行つて来た物語等を記録に留める事が出来ました。

あの時若しも打撃に打ち負けて居りましたら、私の生涯は別のものになっていた

かも知れません。どうやらこうやら私が自分の収入で親へ美味しいもの一つ食べさせる事が出来るようにならない中に父に死なれるものですから、人間の出世とは誰のためか、誰を喜ばせるための勉強か。その親が亡くなった今、まるでもう無意味じゃないかと、危なくアイヌ語の研究を放棄しようと思つたのでした。いやいや親をさえ犠牲にしたこの仕事、生半可な事ではないものか。即ち悲しみは私を駆つて私の仕事に火を入れた結果になつてしまつたから、あの五十日の勉強中は飯など眼中になつたようでありまして、そうやってやつと自分の生涯の基礎を築く事が出来たのでありますから、皆さんにおかせられました。では、順境にお過しになりまして、苦難等という事は無い方が結構でございますけれども、どういう事がないとも限らない。その時こそ奮つて皆さんの生涯の大きな仕事を築き上げられるよう、この事が決して不可能ではないという事をどうぞ思ひ下さいますようお願い申上げる次第でございます。

まあそうやりましたので、それで私は母校の講師を命ぜられ、やがて樺太・北海道へ出張を命ぜられまして、此度は官費でもって北海道・樺太のユーカラの伝承者をあ

まねく探し、大正四年の夏、そうやってかつて私に沢山教えてくれました日高の盲爺さんの村へ廻つたのであります。

盲爺さんは、もつともつと教える爺さんでございましたが、爺さん達夫妻を養つてくれる、家内の姉の家族が病気になるてしまった。医者がありませんので、病気の治療はこういう爺さんの加持祈祷が唯一の治療法なものですから、うちへ帰つてくれ、帰つてくれという手紙が来たので、残念ながら村へ帰つてしまつた。十冊書かせてくれましたけれども、まだ半分だつた。そうやって村へ帰つて皆を加持祈祷して癒したんだそうです。そして最後に自分が罹つた。そういう時にはどうかすると、最後に罹つたのが神様に呼ばれるというアイヌの言い習わしがあるのですが、余り結構じゃないその言い習わしが実現して、その年の十二月七日にとうとう亡くなった事だつた。それで昭和四年がその第三年に当りますから村へ行つて爺さんの亡き跡を弔いましたが、此の爺さんは私へアイヌの宗教的な気持を話してくれまして、死んだ人の祭の話はかなり詳しく教えてくれました。どの家にも家の東窓の外十歩の所に「ぬさだな」、神様に捧げる「幣の棚」が出来ていて、そこが拝所なんだ。神様を拝む場所

なんだ。柳の枝を皮をむいて真白になったのを小刀逆手に房々と采配のように垂らしたものを彼等の方では御幣に使うのです。それを十本も立てます。ころばないように、横に二段に木を渡して、縛ります。垣根のように見えます。古くなりますという柳の木は強いもので根が生えたり、枝が差したり、葉が出て来ますから一寸垣根のように見えるものです。よく乱暴な日本人がそこへおしっこなどして行くもの等があります。アイヌは、「仕様がな。知らないんだからね」と我慢して居りますが、これは神聖な所なんだ。どの家にもそれがありませんから、此処で祖先神を祭る。捧げ物等そこへやって、祭る時には新しい御幣を立てるのです。そして御祈祷の言葉を経て霊等をそこへおびきだす。陽が暮れると今度は家の中に招じ入れて、家の中で皆上座下座へ居流れて酒を汲みかわし、ユーカラをやったり等して御霊を楽しませる。そういう事をアイヌがするといふのでしたけれど、今迄の本というものは、西洋人が書いたものでも、日本人が書いたものでも、アイヌというものを野蛮人と見ているのですから、死んだ人は一向何も構わない。親の命日も知っている奴はいないし、位牌というものもないし、墓参りも

しない。こう云って、まるで死んだ人を構わないという風になっていた。ところがこの爺さんがそういう風に人間に死者を吊らうその祭の事をば「ヌラツパ」——涙を流す事です——一年に三回大祭を行う、それをば「シンヌラツパ」といふ、こういう事をアイヌがやっているが、文字がないから位牌がない。暦がないから何月何日と命日を知らない。死骸を棄てた所は汚水の場所であるから足踏みをしない。さればといつて死んだ人を全然かまわないのじゃない。今申した東窓十歩の外に拝所があって、そこで何処の家でも皆死んだ人達を祭る。それが爺さんが云っているように果して本当かと思つて、一つには爺さんの亡き跡を吊つてあの爺さんの第三年だから「シンヌラツパ」をやるうじやないかと云つてみた。「シンヌラツパ」といふのは大祭なんだ。そうしたら皆が涙を流して喜んで感謝して、本当にその爺さんが生きていた通りの事をしてその爺さんをいんぎんに祭つたのです。そして夜は一晚皆が集つて踊つたり歌つたりユーカラをしたりして夜明かしをしたものだったんです。

この晩の事です。隣の家の青年、これが少しうす馬鹿なもんですから、皆が座に坐らせずにほつたらかされておいたから、一人炉端の所で股火鉢をして居りました。私がか此頃煙草を嗜んで居りましたから、炉端で煙草を嗜んでいたら、私に言うともつかず独り言ともつかず申すのには、「可笑しかったなあ。盲爺さんがよ、先生から旅費が送つてきた時、どんなもんだ、俺らふだんは貧乏しているけれども、いざとなると東京の旦那からこうしてお迎えが来るんだぞ。今に帰る時は村の者にな、薩摩芋の一俵も土産にしてやらあつて、ほら吹いて云つたつけ、あつはは、あつはは」って笑つた。私も連れ込まれて笑いましたけどね。そうだったか、それなら云つてくれりやそれくらい事はしてやったのに、と暗然としたんですが、そのうす馬鹿青年が言葉で継いで「旦那からもらった汽車賃の余りでよ、盲爺さん何買うと思つたら、糸をどつさり買つて来たもんだ。爺さんが言うのは、東京という所は、魚の高い所だった。俺ら裏の沙流川へ登つて来る鮭の一匹も獲つて旦那の所へ送りたいなあとそう云つて、盲が若い時さんざんやった鮭獲り網を手さぐりで編みに掛つた。何日かかたつたあ、何ヶ月かかたつたあ、どうとう盲の一心、網が出来たよ。出来るとその網を持って川へ真夜中に起きて行つては、一人でじゃぶじゃぶと鮭を追い廻して

たよ。あははあ、あははあ、幾ら追い廻したつて、追っかける方に目があるんじゃないやなくて、逃げる方に目があるんだもの。それでも凝りずに毎晩々々やつたよ。可愛想に沙流川の盲鮭の一匹もひつかかってくれたらしいのに、とうとう一匹も獲らずに死んじゃった。あはは、あはは」って笑うんですね。私も連れ込まれて笑いましたけれども、何というあの盲爺さんのあの純情。実は私の家で偶には魚をと思つて鮭の切り身を一日おき二日おきに食べさせると、「旦那これは東京では幾らするんですか」「これか、二銭だ」。その頃、鮭が一切れ二銭だったようですね。高いなあ！って驚いて居つた。東京は魚の高い所だ。旦那へ生鮭の一匹でもやろうというのだったんでしようね。私がそれを聞いたら、笑つても笑つても涙が溢れてしょうがなかったんです。それから婆さん達、このつれ合いの盲婆さん、つれ合い迄も盲になった。それからこれを養つているこれの姉と、それからこの盲アイヌを紹介して東京へ連れて来たコプアメという婆さんと三人居る所へ行って、「おい、婆さん達。盲爺さんのそんなに美しい話を、何故お前達、私に云つて聞かせないんだ。あの阿呆野郎が云つたんで、はじめて解つたんだ。何も私、

昨日今日来たんじゃない。来て一週間もあるんだ。そんなにいい話、何故誰も早く教えてくれなかつたんだ」と談判気味だったんですが、三人の婆さん、一度に異口同音に、私に向つて抗議してきた。「だつて獲つた話なら云つて聞かせますけれども、獲りもしないことを話したつて、旦那、何儲かりますか。それよりもしがたない私達のあした、こうしたという事で有難い旦那様の気持を曇らしたら勿体ないから云わなかつたんだ。隠し立てしたわけではないから、どうか怒らないで勘弁して下さい」。この人達のこうやつて影であらん限りの好意をやつて、私がそれが少しも解らずにしまつても、何とも思わずに我慢している人達だ。ですから往々にして此方から行った和人達にいい土地は侵蝕されたり、それから騙されたり、侮辱されたりしても、仕方がないところとして諦めている。我々は征服者の威をかけて、知らず知らずこの被征服者の純情をどんなに今までも踏みにじつたり、無視したり、知らぬ事とはいいながら、どんなにこの人達を悲しませて来たか。ちらちら私は北海道の方々に聞いた事があるんです。気がついたが因縁、私一人でもいいから幾らか償いをこの人達にしてやらなくてはというような気を抱かざ

るを得なかつたからであります。引き続き二週間、この村のアイヌの家に寝ましたが、この旦那は、アイヌのこういう事が知りたくて東京からわざわざ来た旦那だと云つて、婆さん達三人、見る影もない婆さん達ですがね、取り巻いて、一人の婆さんが済むという次の婆さん、それが済むと次の婆さん、自分達の種族の神秘的な祖先の信仰の叙事詩を歌つて筆記させてくれるのです。以前と違つて今度は、一句一句私には意味が解るものですから、書きながら時々、この婆さん達から、何処を押したらこういうような音が出るだろうかと思うような、対句でたたんだ美しい詩の文句に、もう本当に胸がどきどきするものでした。時には朝から畑へ行く服装で鎌を持った婆さんが入口の所へ腰かけて昼になつてもまだ居る。もう畑へ行くのに遅れてしまうんだらうに思いながら「おい、婆さんまだ居るのか、お前も教えて行くつもりか」というと、「私は何も存じませぬもの」というから、ははあ知らないのかと思つて、構わずこちらの婆さん達からまた聞いて筆記していると、気がつくど何時の間にかいざり寄つて私の脇へ来て、「あはは、婆さん来たか、此度はお前だ」と云つて帳面をそつちへ向けて書きにかかると

いうと、眼を半分薄目に閉じて「アカシヤ  
ポイレシパチネー」ってやるんですね。  
その声の美しさ、節の美しさ、それから文  
句の素晴らしさにあつと参つてしまつて、  
何処の国へ行つたらこういうような、来る  
人来る人が自分の祖先の遠い神話をば暗  
誦していて教えてくれるんだろう。昔支那  
の楚の国には隠者が沢山居て、孔子さんを  
驚かした。その楚の国に行つたら、そうで  
もあるうかと思つたり、二千年の遠い昔に  
生れ返つたというようなこの経験を私一  
人で味わうのが勿体なくて、他の人と一緒  
に分ちたいような、もう立身も出世も忘れ  
て、何という私は幸福者だと二週間は忽ち  
そうやって此の人達の間に過したものだ  
つたのでございます。

そのノートがありまして、此の夏の此の  
婆さん達から聞いた神話の五冊が、私の蒐  
集帳の中で光を放つて居ります。その中に  
はニーカップの酋長の青年が、「一子相伝  
で親爺が病が篤くなつて死に際に私に伝  
えたので、私もこれをばそういう風にして  
伝えようと思つていたのだ。だがもう、だ  
んだん聞いてこれを解る人も無くなつて  
しまふところだった。旦那が盲爺さんに聞  
いた、あの刀を主題にしたイサベルマルと  
いうユーカラを私は聞いた事がないので、

若しそれを聞かしてくるならば、私はこ  
の一子相伝のカムイオイナという最も神  
聖な、異民族に知らせないどころじゃない、  
同族の者でも滅多なものには聞かしては  
いけないために、一子相伝になつて居るそ  
れを、旦那に書いてもらつて後の世に遺し  
てもらいたい」、そう云つて教えてくれた  
ポロオイナというものと、カムイオイナと  
いう、——オイナというのは聖なる伝えと  
いう事です。それに「大きな」という言葉  
がついてポロオイナ「大聖伝」、カムイオ  
イナというのはカミ、「神々しい聖伝」——  
、そういうのが五冊の帳面の中にあるの  
であります。幸い私は愛されて育つたもの  
ですから、ああいう異民族の、ざつと見る  
と、乞食の婆さん達のような婆さんの中  
に入つても、あの人達を愛する事を知つて  
たお蔭で、あの人達も私へ、そういう神秘  
な自分達の秘密の神話を皆打ち明けてく  
れたのが、実は幸せになつた次第でござい  
ます。

時間がたちましてどうかと思いますが、  
南海岸第一のユーカラの名手という、幌別  
のモナシノウクというお婆さんの一家の  
事を一寸申し上げて結ばして戴きたいと  
存じます。モナシノウクは、室蘭線の幌別

村の大酋長の家内でありましたが、二人の  
娘（マツ、ナミ）を持つた時に主人に亡く  
なられて寡婦になつた。この二人の娘は珍  
らしい利口な娘達だったために、日清戦争  
の頃にイギリスの宣教師が函館へ伝道学  
校（愛憐学校）を建てて、伝道のアイヌの  
中から四、五十人の有望な青年男女を教育  
した事があつたが、その時選ばれてその中  
へ入つて、七年函館で勉強して、卒業後こ  
の二人の姉妹がアイヌの伝道婦として働  
いたんです。けれども、この二人共独身で  
伝道婦となつては家系が絶えるから、妹の  
方（ナミ）を知里家へ縁づかせて登別に一  
家を構えた。姉の方はマリヤと云つた。日  
本名は「マツ（金成マツ）」というんです  
が、この人は若い時に高い所から落ちて腰  
を痛めて松葉杖にすがる不幸な不具な身  
で、それで独身でどうとう伝道婦として、  
大正七年頃には旭川郊外に教会を持つて  
そこに老母と自分と、それから妹が生んだ  
女の子の長女幸恵（知里幸恵 ちりゆき  
え）という十六になる人を養女にして三人  
の女性で此の教会を持つていた。そこへ私  
が名前を聞いて尋ねて行きましたら、すぐ  
に話はずんで忽ち、「あつ！今のはあれ  
は終列車、先生お帰りになれません。泊つ  
ていらつしやいませんか」と云われて、私

ははたと当惑したんです。その時お婆さんが、何だかアイヌ語でものを云っているのを聞きますというと、「先生ならいいさ、先生なら別だよ」と云うので、ははあこは女性三人の家であるから、アイヌの親爺等が来ても何か泊めるというのは法度になつてはいるような、だが私だったらアイヌの男とは違うということだったらしいので、私ははつと驚いたんです。お婆さんが「先生はお泊めする事は差支えないけれども、明日何か差上げるものがあるか」と云ったら、マツさん、四十代の中婆さんだったんですが、「それがねえ、無いんでねえ」と云ったら、その十六になる養女の幸恵さんが、「どうせ私達の家に先生の口に合うものなんぞない」と云った。「私の食べ物なら何も心配しなさんな、私はアイヌ部落で泊る時はよくね、そら、そこにも北海道のじゃがいもがある。それはおいしいから塩うでしてもらうと、それで朝食も昼食も夕食も通して居りますよ」っていったら、解られまいと思つて話したアイヌ語の内輪話が、筒抜けに解られてしまったので、じゃがいもで結構だと云うので、私の無難作というか、可笑しさというか、三人転げるようにして笑つて居りましたが、その時幸恵さんが、「お隣りの校長先生の家へお

願ひしてましよう」と行きましたが、断られて「じゃ先生、むさ苦しいのを我慢して下さいますか」と大きな蚊帳をつつて居りましたが、「蚊帳だけでも借りたい」と云つてもう一遍行つたんですが、これも断られたんです。「ではどうぞ我慢して下さいませ」と云つて、次の間が何しろ日曜学校の使う部屋だから非常に広い。部屋一杯の蚊帳をつつたんです。隅の方へま新らしい、さつぱりしたシーツ等敷いてくれたから、「どうも有難う。済みません。それじやお休みなさい」と云つて枕へ頭をつけたら一眠り、私は疲れて居るもんですから、ぐっすり何も知らず、眼を醒ましたら、陽はカンカン、あつと起き上がつて井戸端へ行つて顔をぶるんぶるん。昨夜の炉端へもどつて座つてみるというと真中へ鍋一杯じゃがいもがおいしそうに煮立つて居りました。やあ御馳走様といつて食べながらそれを見るといふと昨夜寝る時と炉端が何だか模様が変わつて居るし、炉の中に檜の小さな枝が半分焼けたのがいつぱいあるんですね。こんなの無かつた筈だ。「はてな、皆さんは何時あの蚊帳へ行つて休んで、何時起きたんですか」と云つたら、顔を見合せてどうも返事が曖昧なんだ。突っ込んで、突っ込んで、突っ込んで聞いたら、

やつと解つた事は、三人の女性はこの風来坊を一人安眠させるために、蚊の多い暑い旭川の夏の一夜を炉端へ蚊やりを炊きながら座り明かした事が解つたんです。それも私が無理に聞いたから解つたので、隠していたらそれが解らず終いだつた。あつと思つた。もう遅い。何という此の人達の、旅人を愛する此の純情。昔の北条時頼公ならば、佐野源左衛門が鉢の木を焚いて歓待したお礼をば、他日鎌倉の晴れの場所所領安堵の記念だの大変な御褒美で面目を施こした。時頼公はいい気持だつたらうと思ひますが、此の貧乏学究が、これ等の人のこの情に何を以て報ゆる事が出来ようかと思つたら、辛く、悲しくさえなつたのです。「宿かさぬ人のつらさをなさけにて朧月夜の花の下臥(大田垣蓮月)」という歌がありますね。宿を断られたその辛さが、今はお蔭で、桜の満開の山の花の下へ寝ていい気持の体験をした。隣の校長さんでもし宿を貸してくれて寝たら、私の半生が全く別のものだったでしょうが、そこへ寝たばかりにそういうアイヌの人達もまた、何とも云えない美しい純情に触れまして、その上一晩寝かさなかつた上に、うるさく質問して苦しめるんじゃないと思つて早く暇を告げました。

暇を告げて編上げの靴の紐を結んでいるときだったです。そのマツさん、四十婆さんが娘さんへ、「幸恵、他の方ではなく先生でいらつしやる、お前も作文だの清書だの見て戴きなさい」「いやなお母さん」と云って照れて居りましたけれども、悪びれずに持って来た。見ますというと、お清書も立派だし、作文がまるで美しい文章体の、詩のような美文を書いて居りました。それに仮名遣いとかな字画の間違いがありはしないかと、私は校正係が商売ですから、意地悪い眼で見ましたけれども、一つも誤りが見出せなかつたんです。覚えず私は感歎したんです。「幸恵さん、こんなに日本語が上手だ。でも可愛そうにアイヌ語は一つも知らないでしょうね。そう云うのが習慣なものですから」と何気なしに私の口から漏れたのです。そしたら、お母さんのマツさんが私の肘をひたたくって、「幸恵といったら、お婆さんの懐でアイヌ語の片言からはじまり、今では年寄にも譲らないくらい達者だ。お婆さんの口真似してユーカラまで出来るんですよ」。私は、幾らなんでもこれはお母さんの子褒めだと思つたんです。そして幸恵さんの顔を見たら、幸恵さんはお母さんの言葉を否定も肯定もしませんでした。そしてその時膝を乗り出

して、「先生、私達のユーカラのために、先生が貴重なお金、貴重なお時間をお使い下すってそんなに御苦労をなさいますけれど、私共のユーカラはそれ程の値打があるものなのでしようか」とこだわらずに出た質問に、「それなら、私も誰に向つてもいっばい云つてきた事を申そうじゃないか」と、靴の紐を結ぶ事等は止めてしまつて、「幸恵さん、あなた方は、アイヌ、アイヌ、アイヌの一語をまるで無学文盲、無知蒙昧、劣等種族のように聞いて来た。人間と犬との合いの子のように思われて侮辱されているんじゃないですか。ところがユーカラというものはあなた方祖先の英雄談をば、詩の形に歌い伝えている。これは叙事詩というものなんです。叙事詩というものは、西洋ではギリシャのイリアッドとオデッセイ、ローマではエニード（アエネーイス）というものがあつた。東洋ではお釈迦様達仏教を讃じたあの人達がマハーバーラタというものと、ラーマヤナという二大叙事詩を持つているんだ。最近百年ばかり前に、カレワラというものが北欧の民衆に口伝えされてた。それから見たら五番目にユーカラが列していいと思う。あなた方がこれを持っているということたつた一つでも、あなた方が劣等の

種族でないという何よりの証拠じゃないか。そればかりじゃない。此の事実というものには我々の祖先の昔もかつてこうだつただけけれども、それは千年二千年の大昔の事で、今から覗きようもない。幸いにあるあなた方が文字を持たなかつたがために、この我々の祖先の二千年前の昔を如実に伝えている。私があなた方のこれを調べることは、単にあなた方の調べをするんじゃない、よつてもつて我々の祖先の事を調べる貴重な資料であるから、私の全財産を傾けても、私の全生涯を注いでも惜しいと思いません。但しあなた方は違ひますよ。あなた方はどんどん新しい事を学んで後ろ指を指されない日本人として生きて行かなければならない人達だ。私達は皆さんの後から落穂を拾うつもりで私はこれをやっているのだ」という風に私が話して来た時でした。幸恵さんが大きな眠いっばいに涙をしましてね。「先生解りました。初めて眼が醒めました。縁もゆかりもない先生がそんなに思つて下さいますところの私達の祖先が私達に遺してくれましたユーカラは、私達は何の気もつかず、私達の事といつたら何でも肩身の狭い、恥しい事のようにばつかり思つていました。何という愚かな事でございます。この眼の醒め

ました今日を境に私は決心を致しました。私の全生涯を挙げて祖先が遺してくれたユーカラの研究に身を捧げます。幸恵が生きているとお聞きになりましたら、ユーカラの研究をやっているんだと思し召し下さいませ」。これが十六娘の咄嗟の言葉ですよ。圧倒されましたね。私は、「おお幸恵さん、いいところへ気がついてくれた」。けれどもたかが十六娘の言葉だと思つて大した重きを置きませんでしたけれども、それでも、「今に私はね、北海道へ、爺さん婆さんの代りに貴方へ聴きに来ますよ」と云つて別れたのは大正七年の夏の話。

北海道開道五十年の年で、あの年に私は北海道をぐるっと廻りました。その年の末です。四年たつたらそれもすっかり本当になつたんです。幸恵さんは、神々のユーカラ十四篇をお婆さんがやっているのを、自分でローマ字で横書きに書いて、右の方にはその逐語訳を美しい日本語で、下へフット・ノート(脚注)を添えて、それを手土産に東京へ現れて来たのです。語学の天才だつたんです。学問が出来るばかりでなしに、人間が本当に純情な、キリスト教の洗礼を受けていてあんな純な娘さんがと、本当に驚く程です。あの学校へ入った時に、旭川の女学校では、私が行つた時には一年

生だつたんです。一年生の一学期がすんで夏休になつたところだつたんです。その頃にはまだ学校の同級生が、「ここは貴方の来る所じゃないわよ」と云うんだそうです。アイヌの子供つていうのは小学校きりなものですから、女学校へ入つた初めのアイヌの乙女だ。ですから、「貴方の来る所じゃないわよ」と云つて遊んでくれない、何をやるにも皆、のけ者にされる。うっかり「お寒い」なんて云うと、「こんな毛皮を着ていても」と云つて馬鹿にする。幸恵さんはやつぱりアイヌの人ですね。毛が多い、こういうところから見えている。それでそう云われると一等痛いところへ触られる。帰りには涙ぼたぼた落しながら帰りしたもんだそうですけれども、朝になつて床の中で目が醒めると、「恨みに報ゆるに恩を以てす」、何という美しい言葉、私にそれが出来るかと、神様がこういう境遇に私を置いたに違いありません。神様、私それが出来るか出来ないかそれをやってみます。そういう気を起して朝になると元氣になつて今度はのけ者にされても笑われても構わずにつこり笑つて、困っている人があると、うんとよく出来るもんですから、丁寧にそれを謙遜に教えたりなどして、三学期になつたら「ああ、あの子は」

と云つて先生も生徒も何だか自分を黙想するような様子があつたが、二年生になったら、どうでしょう、その同級のお嬢さん達がね、アイヌの此の娘を自分達の級長に選んだそうです。東京の人はアイヌというと、少し隔たつているもんですから、ロマチックに考え勝ちですけど、北海道の人は、アイヌと云つたら本当に、犬と人間の合の子くらいに思つていゝんですよ。いや人という言葉が当てはまらないです。人と云つたら日本人。アイヌと人々を差別するそういう気持ちの人達が、自分達の級長に選んだという、此のお嬢さん達の自分の非を悟ること、ねえ！勇敢な、美しい、本當に立派な事だと思つて。この事を、幸恵さんが死んだ後、小説を札幌の新聞で読みました。あの頃に新聞が十円の懸賞の小説をよく募集したものです。その中にある時、女学校へアイヌ人が入つて来たのを皆で侮辱したり差別待遇したりしたけれども、この立派に美しく恩を以て報いられた皆が、謝つてお詫びをしたという事を書いた小説だつたんです。幸恵さんが死んだから聞く事が出来なかつたんですけれども、他にアイヌ人で女学校へ入つた人はありませんでしたから、幸恵さんをモデルにした小説だつたようです。



この幸恵さんに私がアイヌ語で疑問に思っただけで聞きませぬとね、さあもうはつきりと思明して、同じ様な例を袋の中から出すようにどんどん言ってくれる。英語だったら複数単数という事がありますから、何時か英語を教えてこれは単数でこれは複数だと云ったんです。動詞についての時だったんですが。そしたら「そういう事ならアイヌ語にもございます」といって、例えば一人で座っている時はアというけれども、何人も座っている時はロツクといったり、一人の人が行く時には、アロパといったり、沢山の人の行く時にはバエと云ったり、来るといふ言葉もエツクですけれども、沢山来るといふ時にはアルキといったり、こういう風なのが沢山ある。こういう事は私は知っては居りましたけれども、三人のアイヌが来た、とそういう時に、レ・アイヌという三人のアイヌといふこと。人と三だからエツクでなしに複数のアルキ、レ・アイヌ・アルキという、アイヌはきつとレ・アイヌ・エツクと直すんです。三人だから複数の方を使って、何故直されるのかそれが解らなかつた。果してこれが複数だろうかと思つと、何人もの時はこういうんだと年寄が云うんですから、まさに複数形だ。しかし(動詞に)複数形を使うという

と、複数形じゃない方に直される。これに私は十何年疑問で疑問で、果てしようがなかつたから幸恵さんに聞いた。そしたら何でもない事だった。三人と三と断つたら来たのは一人じゃないという事は余りにはつきりしているから、ここを複数を使うという、馬から落馬したとか、被害を蒙つたとかいう事と同じになります。こういう風にしても三とか五とか一人じゃないといふことをはつきり数詞を用いて表現した時には、動詞は複数を使うに及ばない。即ち諒解の限度に於ける文法なんだ。イギリスなどの文法だといふと例えば、three menといふとareと云わなければならぬ。three menといふからもう一々、一人じゃないつて事は解っているのに、threeと云つたからと名詞も複数にする、動詞も複数にする、これは必要以上に文法に走つたぜいたくな形だ。これはイギリスの有名な第一流の言語者のヘンリー・スウィート(Henry Sweet)も云つて居りますし、イーストレーキ(Fredrick Eastlake)も云つて居ります。なんです。だからそれに慣れて居るという他の言葉もそのように思ふのが人間の弱さ。こういう風に世界の言語の中には、必要限度の文法があるんです。アイヌ話は

それだ。そうやって見るといふと、ヨーロッパの言語にもそれがあつたんです。ウラル山脈の中にある多くの言語だの、ウラル山の東の方の北氷洋の方にある言語も皆そうなんだ。そういう風な事が何でもなしにはつきりと幸恵さんが説明してくれる。こういう風にして、後に恩賜賞を戴きました私の叙事詩の文法の研究は、幸恵さんの教えが数々あつたのでございます。

この幸恵さんは残念な事に、私の家で亡くなつてしまつたのです。自分の苦痛を話して心配させる事は悪いこと、こういう觀念の人だつた。それから人間の凡そ犠牲になつたといふような話を聞くと涙を流してその人のためにお祈りをする人でした。勿論キリストが人類の犠牲になつたからそれでキリストを讃美するあの耶蘇教的精神でしょうが、そうやって犠牲になつたお話等はよく知つて居りまして涙を流して話したものでした。そうですからこの集めてきた神々のユーカラを一冊の本(『アイヌ神謡集』)にしてあげたんですが、その最後の校正を終えろと一緒に心臓麻痺を起しまして、口からあの赤いしゃぼんの泡のようなものを限りなく吐いてしまつた。何だかあんな事がなかつたんですが、「先生！」と云つて、手をこう出したんで

す。何だろうと思って、「どうした」と云ったら、「はあーっ」とそれを吐いたんです。覚えずその手につかまって、「幸恵さん！幸恵さん！幸恵さん！」と連呼した三声目に微かに答えたそれが最後だったんです。天から恵まれた唯一の宝玉を手から取りこぼしてしまったのです。この罪障はどんなことをしても私は償う事が出来ないであります。それだけなら未だしも、国にいる老母が、「幸恵が死んだ。幸恵が死んだ」と云って夜も昼も泣いてとうとう睡眠も出来なくなり、食物も食べられなくなり、とうとうそれで死んでしまったのです。

お婆さんこそは南海岸第一の名人だったんですが、あまりに痛々しくて、お婆さんから一行も筆記しない中に死んでしまったのであります。そのときに、四十婆さんのマツさんから、「もう母も亡くなる前に、あまり悲しんで少しもうろくして、ユーカーをやっても途中から別のものになつて到底駄目になりましたから、私がどうか伝えてこれを先生にお教えしますから」と云って私を慰めてくれて居りましたから、老母が亡くなった時、「もう老母も亡くなりましたし、それから日本の聖公会の方も、イギリスから独立して、イギリス

から月々のお金が来なくなったので同時に退いてしまった。それで幸恵の七周忌の時には、東京へお墓参りに参ります」と言っておりましたが、昭和三年頃にとうとう松葉杖にすがってやって来たんです。亡くなった養女の志をも遂げしめ、北海道南海岸第一等の老母の蘊蓄をも私に伝える、そして幸恵さんの墓参りを兼ねたものだった。ところが東京へ来て見たら、私は朝から晩まで忙がしい。学校を五つも六つもかけ持っている。言語学の講義というものは一つの学校でも二時間しか入用のないものですから、一つの学校から僅かしかも出来ないものですから、五つも六つも学校をかけ持った。幸い、こつちへ来てくれ、あつちへ来てくれといつて下さる。私はアイヌ語を専門にするんですから、周旋の口など探した事などないのです。どうせそんなものを教える学校はないから、頼んだって出来っこない。どうかするというと、あいつが苦しんでいるそう。俺の方へ来て言語学やれ、俺の方へ来て言語学やれといつて下さるもんですから、もうその中には五つも六つも七つも学校で言語学をやつて、どうやらしのいで居ったんですが、そのためにマツさんが折角私に教えようとして来て、大抵、私は書けなくなっちゃった。

もうそれは精神を集中しなければなりませんから、へとへとに疲れて帰っては書けないからすぐに寝てしまいますから。それでマツさん、退屈しちゃった。或る時私が帰ってきた時、「先生、退屈しましたから、これを書いて置きました」と云って昔習い覚えたローマ字で、老母の言うのを自然に覚えて暗誦しているのを書いて置いた。

「イレシユシヤポイレシユユビイレシパチネダンヌカネカツコロカニオカアニケカムイカツチャシチヤシウシチヨロアユオレシユ」。そういう風なものだったんです。私がこう読みましたら、お婆さん喜ぶの喜ばないの「私が書いたのでも、先生がそういうようにお読みになりますならば、何も先生を煩わす事がございません。私が書きます」と云ってそれから書きも書いたり、お婆さん、国へ帰ってからも書き続けましたから、昭和三年から昭和十九年迄に、七十二冊書いた。一万五、六千頁です、等身大。これは日本の御婦人だってなかなか容易な事じゃありません。

これは、たった一つの文献ですから、焼いたら無になりますから、戦争中これを焼くまいとどんなに苦心したか。その苦心談をきいて国学院大学のあの文化研究所が、よし、マイクロフィルムに撮つてやろう、

と云って全部をマイクロフィルムに撮りました。ついでに盲爺さんから私が書いたり、婆さん達から書いた私の四十冊あります。これも撮っちゃった。それからそれをとうとう写真に焼いて副本二通をこしらえたんです。それは大変な容積です。こんな解らないのをただ蔵って置いても仕様がな、金田一先生にこれを訳させようじゃないかと誰かがいい出したんだそうです。私がそれを伝え聞いて、私達は出版も出来やしまいし、誰も買う人があるまいからといったら、文化研究所で会議にしたそうですが、物さえあれば金は何とかしようじゃないかと、理事の中に渋沢敬三さんだそうですね。それで計算してみると三千万円かかるというんです。そうしたら渋沢敬三さんは、「三千万円はどうかしようじゃないか」といったんだそうです。それで国学院の文化研究所は学校の研究所の研究題目三千万円の予算、「アイヌのユーカラの研究」と積立をちゃんと書いてあった。そこへロックフェラーが日本へ来て、私立大学の研究を、何処の大学でどういう研究するか書き出せ、早稲田大学だの慶応大学で、こちらでは九万円の予算でこういう研究をしている、十五万円の予算でこういう研究をしている、とこういうものだった。

た。国学院は三千万円。そしたらロックフェラーという人も大きな人ですね。他の研究はヨーロッパやアメリカでもやっているが、アイヌのユーカラとやらは、これこそは日本だけの研究、こういうのへこそ援助したいといって、それが承知されて、何でも受取りに来いといって受取って来たもんですよ。第一回目に受取った時に新聞へ出ました。慶応が九万円だとか、早稲田が十五万円、国学院は三千万円と書いてありましたが、小さいところへ書いてあるから誰も余り見なかったんですね。三ヶ月もたつてから朝日新聞がそれに気がついて、「どういう事です」といつて来たから、国学院の文化研究所へ行つて聞いて下さい、といました。何でもあれは八月頃でしたか、その事が出ておりました筈です。こうやって、このマツさんの仕事も私の畢生の仕事になつて今翻訳に一生懸命になつています。幾らかマツさんの苦労も報られようとも思いますし、それから何とかしてお礼をしたいと思つておりまして、文部省だの無形文化財保護委員会へ話が行つて、マツさんへ三十一年紫綬褒賞が降りました。年金養老金五万円を受取るようになった。でも、私は何もお礼の約束もしないけれども、私のために筆記する時

には、こんなに書いたお婆さんが、文部省が、「役所は形のないものに出せないから、何か書きなさい、そうしたら五万ずつ上げます」というのに一行も書かない。それで文部省がびっくりして私のところへ来て、どうしたもんだらうと云う。私も仕様がなから飛行機で飛んで行きました。「お婆さん、何で書かないんですか」。そしたら書かないのも道理、妹夫婦の家の玄関の所にこうしているだけで、毎日人が出入りするでしょう。それはユーカラを筆記するしたら、少し微醺を帯びて夢幻の境地に入つて、そしてありありと目に見るように状況を想い浮べてそれを書くんですから、毎日人が出入したり、子供がぎやあぎやあ泣いたりする所にいるので出来ない。それでお金を少しやってお婆さんの家を一軒を建ててやりました。そしたら書くと思つたらそれでも書かない。「もう金田一先生にみんな書いてやったから書くものがない」といつておつたそうですが、文部省では、八十四になりますからね、「御老体に無理にとは申さない、結構です」といつて一回だけ甥の知里真志保博士がお婆さんのいうのを書いて、そして出ました(のちに『アイヌ叙事詩ユーカラ集』)。(以下約十分間機械の故障で録音が入らず遺憾ながら

割愛しました。）

以上長時間にわたりご清聴を感謝します（拍手やまず）。

金田一京助氏は明治十五年岩手県に生れ、明治四十年東京大学言語学科卒業専攻、言語学・国語学・アイヌ語学。文学博士。学士院会員、言語学会副会長。

昭和七年学士院恩賜賞、昭和二十九年文化勲章受賞。早大、実践女子大、東大各教授を経て現国学院大学教授。

著書には「アイヌ叙事詩ユーカラの研究」、「アイヌの研究」、「国語音韻論」、「アイヌ文学」、「定本石川啄木」などのほか「日本文学辞典」、「辞海」などの編書・監修書多数。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。